

児童一人ひとりの居場所となり、安心して生活できる学級づくりの在り方について

— 児童の実態に応じた学級経営・学習指導を通して —

東海村立照沼小学校 教諭 萩谷 勇祐



何が始まるのかな？

一 主題設定の理由

教員となり三年、子どもたちと関わる中で感じることはいつもどこかに「不安」を感じているということである。その原因は学習面・交友関係など多岐に渡るが、特に上級学年になるにつれてその不安は顕著となり、登校しづりや不登校に発展するケースが多いと感じている。一年の大半以上の時間を学校で過ごす子どもたちにとって、「安心して学校生活を送ること」が最も大切であり、児童を取り巻く保護者や教員、地域の人々みんなの願いであると考え。高学年の担任となり児童の実態を把握する中で捉えた課題として、一人ひとりの児童が安心して生活できていない状

個々の児童が安心して生活できる学級がつくれるであろう。
四 主題に迫るために

(一) 学級の実態

六学年の担任となり児童十一名と接し、関わり観察した姿から、他者を傷つける言動が多々見られ、それを止めるような発言が見られず一部では容認している様子があること、学習・生活面において「自分にはできない」「私たちは必要とされていない」などの負の雰囲気があることが感じられた。

令和三年度の全国学力・学習状況調査の質問紙の結果からは、全国平均と比較して国語や算数が好き・分かると答えた児童の割合が著しく低いことや、「学校に行くことが楽しい」「自分自身によいところがある」という問いに対して、五四・五%の児童が否定的な回答をした。

令和二年度の県学力診断のためのテストの結果では、学級における四教科合計の平均点が県平均点よりも、大きく下回っていることが分かった。

(二) 基本的な考え方

一人ひとりの居場所のある学級とは、安心感が得られ、自他を認め合うことができる学級だと考える。また、安心して生活できるとは、交友関係に問題がなく、自分の生活

況や他者を簡単に傷つけてしまう言動の改善を図る必要があると考え、本主題を設定した。

二 研究のねらい

多様な子ども一人ひとりの実態に応じて「互いを認め合い、安心できる学級の環境や風土醸成」、「楽しく、分かる授業及び学習意欲が高まる自主学習」等での支援の工夫を行い、個々の児童が安心して生活できる学級をつくる。

三 研究の仮説

子ども一人ひとりの実態に応じて「互いを認め合い、安心できる学級の環境や風土醸成」、「楽しく、分かる授業及び学習意欲が高まる自主学習」等での支援の工夫を行えば、
する教室環境が整い、学習が分かったり楽しいと感じたりすることだと考える。

学校教育相談研究会「学びの中で安心感を生む学級づくり―友達との関わりを通して不登校を未然に防ぐ教育相談的な関わりを探る―」（川崎市総合教育センター研究紀要第三四号（令和二年度））において、「安心感とは、その児童生徒が発達の過程で獲得した安心できる能力や自己受容感（基本的自尊感情）が必要となるものであり、友達との関わりや学級とのつながりの中で得るもの」と定義し、安心と感じる状態になるためには、「学級への帰属感」「友達との関わり」「個人能力・特性」が関わりと述べられている。この考えをもとに、本研究を進めていく。

五 実践内容と結果

(一) 互いを認め合い、安心できる学級の環境や風土醸成（学級経営）

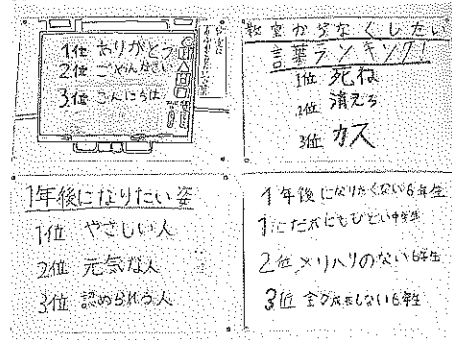
ア ロッカー・道具箱の整頓

毎日朝の会で、自身のロッカーや道具箱を整頓する時間を設けた。隔日でロッカー・道具箱と場所を変えて整頓し、終えたら児童同士で必ず確認し合うようにした。見栄えや使い勝手がよい置き方などをみんなで一つひとつ確認することで、統一感のある整った教室環境を目指した。この実

実践のよさは、環境を整える習慣が養われたことと、学習用具の紛失や盗難と疑われるような事案が起きなくなったことである。ロッカーの上に消しゴムのカスがあつたら、誰に指示される訳でもなく自主的に帚と塵取りで掃除をしたり、教室内の植木鉢が風で倒れてしまったら、直ぐに元通りにしたりする児童の姿が見られるようになった。

「一年後になりたい、なりたくない姿等」に関するアンケート結果の掲示

四月当初に、「一年後になりたい姿」「一年後になりたくない姿」「教室にあふれさせたい言葉」「教室からなくしたい言葉」について児童へアンケートを実施した。その結果をランキング形式にした掲示物（資料一）を、児童に作成させ、一年間教室に掲示した。掲示物は自分たちで決めたルールや願いの指標となり、自然と言葉遣いに気を付けたり、目標とする姿を目指したりする様子



資料1

が養われた。また、学校行事でスローガンを考えたり、学級で何か問題が起こったりした時に立ち返る物となり、自分たちの目指す学級像を明確にすることができた。

ウ 迅速で丁寧な生徒指導対応

「一歩目は素早く、二歩目は慎重に」を心がけ、迅速かつ丁寧な生徒指導対応を行った。本校は全学年が単学級のため、クラス替えがない。よって、級友同士の絆は強い反面、一度交友関係に大きな問題が生じるとその溝は大きく深まっていく。実際に、児童からの交友関係に関する相談の多くは、最近起きたことではなく、過去の学年で起きた問題が関係していた。その背景を踏まえ、児童からの相談にはどんなことにも耳を傾け、その日のうちに事実を確認することで児童が安心感をもてるように努めた。事実確認後はすぐに生徒指導主事や管理職に報告して連携を図り、対応策を考えた。また、保護者の方にも連絡し、家庭での協力を仰ぐようにした。また、日頃から児童の悩みがすぐに聞けるように、週一回児童個人と私とで交換日記を行ったり、月一回短時間の面談を行ったりして児童理解に役立てた。

エ ほめ言葉のシャワーの実施

毎日帰りの会で「ほめ言葉のシャワー」の機会を設けて

実施した。ほめ言葉のシャワーの対象となった児童一人に対して、週内に一人一回以上が必ずその児童を称賛する言葉をかけることとした。また「プラスワン」のコーナーを設けて、級友の頑張りを自由に称賛し合うことができるようにした。

児童には四月当初、学級活動でプレゼン資料作成ソフト「パワーポイント」を用いて「ほめ言葉のシャワーの話」を行い、認め称賛し合うことの大切さを考えさせたり、担任の思いを伝えたりした。また、人をほめる際には「数字を入れる（時間や回数）」「その時の様子を詳しく伝える」「自分が感じたことを入れる」「成長の変化を伝える」といったポイントがあることを伝えた。これにより、児童たちはただ互いを称賛するのではなく、具体性がある意図のあったほめ言葉のシャワーの活動となった。児童は互いのよさを積極的に見つけ合い、意欲的に発表していた。中には、学級全員がほめ言葉のシャワーを発表する日があつたり、一人で五人の級友に対してほめ言葉のシャワーを発表する児童がいたり、互いを認め合う風土醸成が徐々に培われていった。

オ 児童の頑張りを伝える、週一回の学級通信

四月当初から「あしあと」と題した学級通信を週一回発

行した。共働きの家庭が多く勤務時間内に電話が伝わらないことが増えていることもあり、いつでも手に取り見ることができるよう学級通信を作成しようと考えた。そのため、日頃から児童の様子を注意深く観察したり、活躍の様子をカメラに収めたりするよう心がけた。児童のよい行いや写真を出す際には、偏りが出ないように名簿で登場回数をチェックして作成するように配慮した。また、この学級通信は、帰りの会に児童にも読み聞かせた。級友・保護者など多くの人が児童の頑張りを確認できることにより、称賛の会話が増え学期末に実施した自作アンケートでは、「友達は自分のよさや頑張りを認めてくれる」「先生は自分のよさや頑張りを認めてくれる」で九割以上の児童が、肯定的な回答をする結果となった。

（二）楽しく、分ける授業及び学習意欲が高まる自主学習（学習指導）

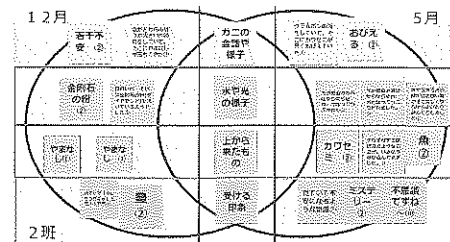
ア 児童自身が選ぶコース別学習（算数科）

算数科の適用問題を解く時間には、児童自身が自分の理解度で選べるコース別学習を取り入れた。T2の教諭と協力し、自分の力で問題を解き進める「もくもくコース」と教師と解き方を確認しながら進める「じっくりコース」である。本学級の実態として、算数科が得意・不得意な児童

が大きく二極化している状態であることや、基礎学力の定着が課題である児童が多かったことを踏まえ、児童の実態に応じた丁寧な学習支援を行うことを考えた。また、児童の学習進行度を把握するために、黒板に表を書き、解き終えた問題番号にネームプレートを貼らせるように指示した。児童一人ひとりの苦手分野に対して丁寧な指導を行うことにより児童の「分かった」という声が徐々に増え、一月に実施した県学力診断テストでは、前年度の算数科の学級平均点よりも九・六ポイント高い結果を出すことができた。

イ 思考ツールを用いた一人一台端末の学習（国語科）

国語科ではGoogle Jamboardで思考ツールを積極的に活用した。例えば、「やまなし」の学習では各自が物語を読んで「疑問に感じたこと」「不思議に思ったこと」「ひっかかったこと」「おもしろかったこと」「調べたいこと」の五つの視点から自由に「問い」をつくり、その後グループで沢山出た問いの中から三つをピラミッド図にまとめて、自分たちの選んだ

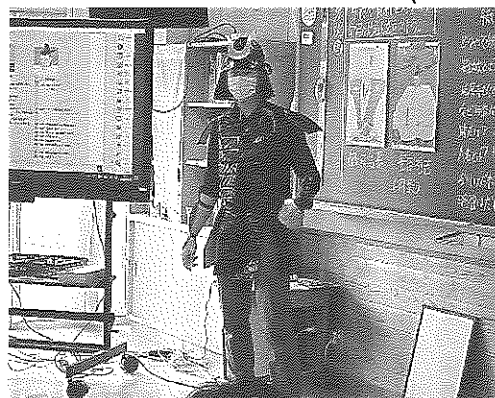


資料2

問いに迫っていく学習を行った。また、五月と十二月の場面を考える際には、ベン図を用いて二つの場面の対比に気付けさせることで物語の主題に迫ることができるようになった（資料二）。他単元・教科でも思考ツールを用いた一人一台端末の学習を積極的に進めたことにより、児童の学習への意欲が高まり、自身の思考を整理し他者と比較することで考えを明確に文章にまとめることができる児童が増える結果となった。

ウ 実感を伴った歴史学習（社会科）

社会科の歴史学習では、平安時代は貴族、鎌倉時代は武士、江戸時代は奉行といったその時代に登場する人物になりきって授業を行った（資料三）。歴史学習は実感が伴いにくいため、児童にはその時代の特色や生きる人々の様子を少し



資料3

でも感じて理解してほしいと思い、始めた。また、ただ演じるだけでなく例えば、安土桃山時代においては、架空の武将「萩谷信吉」になり、単元の課題を「萩谷信吉に織田軍、豊臣軍のどちらに味方すればよい提案せよ」と示して二人の戦国武将の功績に迫る学習を行った。織田軍、豊臣軍に分かれてグループをつくり、教科書やインターネットで調べたことを「パワーポイント」にまとめて、プレゼンテーションを行い合った。児童は楽しく学習を行うと共に、どうしたら相手よりも優れている武将だと説明できるかを考え、プレゼンテーション技術を高めていった。

エ 学習したことを主体的にまとめる「ノートまとめ」

社会科や理科の単元まとめの際には、ノートの見開き一ページに単元で学習した内容を自由にまとめるノートまとめの時間を設けた。その際、「ノートまとめポイント10（資料四）」という、ノートをまとめる際の指標を提示し、そのポイントに沿ってノートが書

ノートまとめ

- ① タイトル
全体を通してのタイトル。
- ② 見やすさ
ざっくり、ざづかい。
- ③ 工夫
図や表、イラスト、写真、ラミネートなど。
- ④ イラスト
図や表、ラミネートなど。
- ⑤ 図・表・グラフ
説明に役立てる。

ポイント10

- ⑥ 行
行を分けてきれいに。
- ⑦ ていねいさ
文字、色、絵、全体で統一。
- ⑧ くわしさ
自分の言葉でかく。
- ⑨ キーワード
自分の考え、分かったことなど。
- ⑩ 考え
自分の考え、分かったことなど。

資料4

かれているか十点満点で評価した。また、活動の途中で児童同士がノートを見合う時間を設けることで、級友がどのようにまとめているのかを知ったり、よいまとめ方を学んだりしたりする機会を設けた。児童は、単元で学習した内容を自分なりのテーマをもって、まとめ作業を行うことができるようになった。また、普段の授業でノートを取る際にも、「ノートまとめポイント10」の視点を生かし、主体的に工夫してノートを仕上げる力が育っていった。

オ PDAサイクルを活用した「けてぶれ学習」

自主学習では、「計画」「テスト」「分析」「練習」を行う「けてぶれ学習」を推奨した。学習習慣や自身の学習を振り返り、定着度を高めるための学習方法を確立させることをねらいに行った。四月初、児童には「パワーポイント」を用いて「けてぶれ学習」の意図やねらいについて説明し、学期ごとに毎日どのくらい自主学習に取り組むかを自身で考えさせ、その達成状況を毎月振り返りシートに記入させた。また、その結果を見ながら児童一人ひとりと学習面談をもち、今後の学習の方向性について話し合い支援を行った。毎日自分で学習課題を立て自主的に学習を進め、学校でワークテストを行った際は間違えた問題に対して「なぜできなかったのか」を分析して解き直しを行った。この実

実践を通じて児童の学習習慣が培われ、ほとんどの児童が毎日家庭学習に取り組み提出することができるようになった。

力 学習の取り組みを互いに称賛し合う自学交流会

週に一度、自主学習ノートを互いに見せ合い、取り組みや頑張りを称賛し合うコメントを記入する「自学交流会」を行った。この実践は、他の級友がどのような自主学習を行っているのかを確認し自分の学習に役立てることと、互いに学習の取り組みに対して称賛し合うことで、自主学習の意欲を高めることをねらいとしている。自主学習を行う上で多く聞かれる悩みが、「ネタ切れ」である。どのような学習をしたらいのか分からない、自主学習を続けられなくなってしまうことがないように、他の級友がどのような学習をしているのかを把握できる機会を定期的に設けた。また、教師だけでなく級友に取り組みを称賛する言葉を書いてもらうことで、児童の自己肯定感が高まり意欲的に学習に向き合うことができるようにした。児童たちは意欲的に自主学習に取り組み、学級には互いの頑張りを認め合う雰囲気が高まった。

六 成果と課題

(一) 成果

児童一人ひとりの居場所となり、安心して生活できる学

級づくりのために、「互いを認め合い、安心できる学級の環境や風土醸成」と「楽しく、分かる授業及び学習意欲が高まる自主学習」の手立ては有効であった。

互いを認め合う機会を設けることで、児童は互いのよさに意図的に目を向けると共に、自分のよさにも気付くことができた。また、児童同士の関係性もよくなり学級として協同性や帰属性が生まれた。生活環境を整備する機会を設けることで、整った環境が児童の心にゆとりや安心感をもたらし、落ち着いた生活を送るための基盤を作ることができた。

授業及び自主学習の工夫改善を行うことにより、学習意

る立場から、休み時間が圧迫され、個々の児童と直接関わる時間がなかなか取れなかった。今後は学級経営方針を基に方策を厳選し、児童・教員共に学級生活にゆとりをもち、児童個々と関わる時間を確保して、遊びや談笑など様々な関わりから、児童との信頼関係向上を図っていきたい。

七 参考・引用文献

・菊地省三(編著)「小学校発！一人ひとりが輝くほめ言葉のシャワー」[第二版] 日本標準二〇一九年二月第二版第二刷発行

・葛原祥太(著)「『けてぶれ』宿題革命！子どもが自立した学習者になる」学陽書房 二〇一九年七月

・高橋朋彦 古館良純(著)「学級づくりの自信がもてるちよこつとスキル」明治図書出版 二〇二〇年二月

・樋口万太郎(著)「GIGAスクール構想で変わる！一人一台端末時代の授業づくり」明治図書出版二〇二一年二月

・川崎市総合教育センター 研究紀要第三十四号(令和二年度) 学校教育相談研究会「学びの中で安心感を生む学級づくりー友達との関わりを通して不登校を未然に防ぐ教育相談的な関わりを探るー」二〇二二年三月

(二) 課題

児童一人ひとりと直接関わり信頼関係を築く時間を確保することに、課題が見られた。安心感のある生活のためには、学級担任と児童との信頼関係が必要不可欠である。学級をさらによくしたいという思いから多くの方策を行ったことや、最高学年として学校の様々な行事活動をリードす

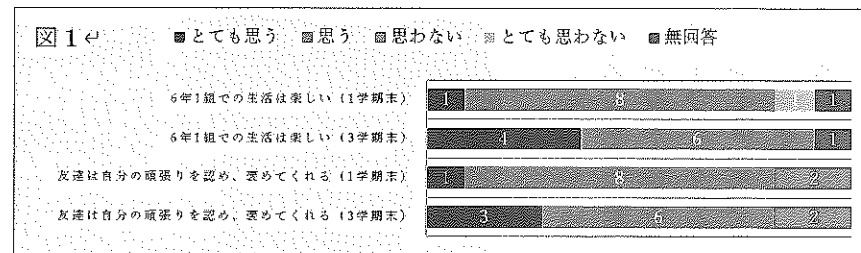


図1 学級生活について問うアンケートの結果比較